



別海町立中春別中学校



学校だより

令和5年5月29日 発行 校長 葛迫 勝秋

教育目標：【中春っ子 未来を拓こう みんなの笑顔】

～自らの未来に向かって、目標を高く持ち、仲間と協調しながら前向きに挑戦する子どもを育てる～

『エレファントシンドローム』になっていませんか？

校長 葛迫 勝秋

インドでゾウを調教するお話から…

ゾウの調教をするときに、調教師はどのような方法を取るかご存じでしょうか。そう、あの大きなゾウです。あれだけ大きな図体をしている動物ですから、その力も相当なものです。この大きなゾウを飼いならすために、まずどうするかというと最初にゾウの足に頑丈な鎖をつなぎます。そしてその先に、これまた頑丈な大きな木をつなぎます。そうすると野生のゾウは当然暴れだします。何とかその邪魔な鎖を外そうと、また木をなぎ倒そうと必死に抵抗します。何日も何日も抵抗します。足から血が出ても抵抗をやめません。しかしその後、どうしても自分の力ではこの鎖から逃れられないと分ると、やがて諦めてしまいます。そうするとそのゾウには鎖に足をつながれると、もう自分はそこから動けないんだという「固定概念」ができてしまいます。そういう固定概念を植え付けてしまうともうしめたものです。この次からは、鎖の先に小さな杭を打ち込んでおくだけで、逃げ出したり、暴れたりしなくなるのです。そのゾウの力からすると、いとも簡単に抜けてしまいそうな杭であっても……。こうして凶暴なゾウもおとなしいゾウに飼いならされてしまうというお話です。

自分の限界を自分で決めてしまったために、本来持っているポテンシャルを発揮できないことの例えとして用いられるお話です。人は誰も、自分に対してある種の固定概念をもっています。自分の中で「自分はまあこんなところだろう」という基準を持っています。それはゾウのお話のように、過去の体験から自分自身で無意識のうちに設定したものです。他の多くのことも、「自分は大体このくらい」という基準や枠といったものにとらわれてしまいがちです。しかし、私たち「人」は欲求（～したい）や夢や目標、創造する力を持っています。簡単に「線引き」をせず、挑戦することを諦めないでやってみることで、案外簡単に「あれ！？できる！！」と予想もしなかった新たな自分に出会うことがあります。

子どもたちにとって「何ができるようになるか」を問いながら、無限の可能性を最大限に引き出すための学校教育をこれからもより一層進めていかなければならないと改めて感じたところです。